



TAKANO LANDSCAPE PLANNING
50th ANNIVERSARY 2025

高野ランドスケーププランニング設立50周年記念：第三弾

高野文彰を語る会トークイベント

ランドスケープは誰のために

想像/参加/風景

IMAGINATION・COMMUNICATION・LANDSCAPE

木下勇 × 浅海義治 × 山崎亮

2026 2.28(sat)

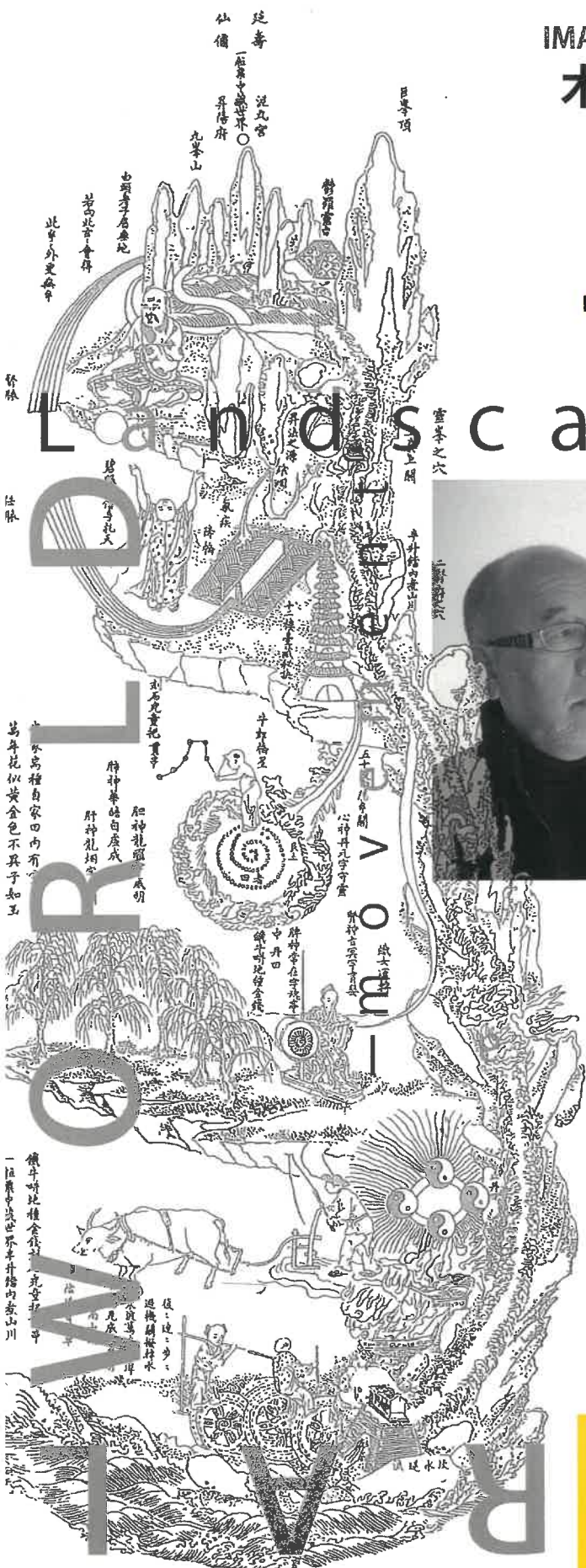
時間 18:00-20:00

会場 早稲田奉仕園スコットホール

会費 1000円

トークイベント終了後、会場を移しての懇親会(料金別途)をご用意しています。
ご参加ください。

主催：高野ランドスケーププランニング株式会社



高野サロン:TAKANO SALON

トークイベント・懇親会 受付

時間 16:00-18:00

会場 早稲田スコットホールギャラリー

入場無料

スコットホールの南側、半地下に位置するギャラリーです。
TLPが取り組む「デザイン」「市民参加」「環境」の3つのフィールド、
高野文彰の仕事に対する情熱、こだわりを映像・パネルで紹介しています。
トークイベントの開場までの間、ごゆっくりお過ごしください。

お問い合わせ:

高野ランドスケーププランニング東京事務所/初 奇霖
TEL:03-5937-4876

TAKANO FUNIAKI



高野ランドスケーププランニング設立50周年記念：第三弾

高野文彰を語る会トークイベント

ランドスケープは誰のために

想像/参加/風景

IMAGINATION・COMMUNICATION・LANDSCAPE

2026年2月28日(土)

早稲田奉仕園スコットホール

登壇者プロフィール

木下 勇

KINOSHITA Isami

1954年生まれ。大妻女子大学社会情報学部教授、千葉大学名誉教授、工学博士、東京工業大学で建築を学び、80年代初期よりワークショップによるまちづくりを推進。(社)農村生活総合研究所、千葉大学大学院園芸学研究科を経て、現職。著書に『ワークショップ～住民主体のまちづくりへの方法論』『遊びと街のエコロジー』『三世代遊び場図鑑』『アイデンティティと持続可能性』(共著)『子どもまちづくり型録』など

浅海 義治

ASANOUMI Yoshiharu

1956年生まれ。北大卒業後、高野ランドスケーププランニングに在籍。カリフォルニア大学パークレー校大学院修了、現地のMIGにて参加のまちづくりの実務経験を積む。帰国後は世田谷区「世田谷まちづくりセンター」創設に関わり、アメリカでの参加のデザインを日本に橋渡しする。プロジェクトに「北沢川緑道せせらぎ再生」「桜丘すみれば自然庭園」「地域共生のいえ」制度など。著書に『参加のデザインの道具箱』

山崎 亮

YAMAZAKI Ryo

1973年生まれ。関西学院大学建築学部教授、大阪府立大学大学院、東京大学大学院修了、工学博士、社会福祉士。建築・ランドスケープ設計事務所を経て、Studio-L設立、代表。「人と人を結ぶ」をコンセプトにデザインの力で地域のまちづくりに携わる。著書に『コミュニティデザイン』『コミュニティデザインの源流』『縮充する日本』『地域ごはん日記』『ふるさとを元気にする仕事』『コミュニティデザインの現代史』(共著)など

会場案内



東京メトロ 東西線 早稲田駅より徒歩5分

JR山手線・西武新宿線 高田馬場駅より(バス利用10分)

東京メトロ副都心線 西早稲田駅より徒歩8分

大地の芸術祭 2000-2022 追悼メモリアルシリーズ
今に生きる越後妻有の作家たち Vol.7
高野文彰展より再掲載

公園の自由

樋口裕康

建築家・象設計集団

戦後まもなく、トタンのバラックが、力強く、つくしのようにニョキニョキ生まれ、大小の空き地が出現する。なにもない空っぽの原っぱ、子どもたちは群れて駆け回る。紙芝居、焼き芋屋が出回り、大人たちは縁台で涼む。バクダンの降ってこない平和な風景。公園の自由、道の自由。

その後、原っぱに建物が立ち並び、道は車に占拠され、原っぱは次々と消えてゆく。自由までも。

1960年代、カリフォルニア大学パークレイ校、構内の駐車場に学生、近隣の住民が、自分たちの公園をつくりだす。それぞれ勝手に集まり、心安らぐ時間を過ごす。

時代はベトナム戦争真っ只中、殺しあい、無差別に村を焼きはらう、枯葉剤による森林の枯死、農地の破壊が繰り返される。集まること、絶対的自由には敏感な時代、戦争反対、公園にも警察が介入し、公園の自由は奪われる。

1968年、ローレンス・ハルプリンから映画の誘いを受ける。『People's Park (ピープルズパーク)』であった。

高野は衝撃を受ける。その後、平和と自由を目指して、一生、公園をつくる方法を模索する。公園は誰のもの？道は何のために？

1972年、沖縄、本土復帰、基地の縮小、全面撤廃の希望はかなえられなかった。

1975年、ベトナム戦争終結。だが沖縄は相変わらず騒然としていた。暴行、戦闘機・爆撃機の騒音、日本による乱開発が沖縄を縦断する。同年、沖縄国際海洋博覧会、明らかな国策だ。多くの建造物は日本からの直輸入だ。

沖縄海洋博覧会記念公園の子どもの遊び場の計画、高野は場所(沖縄)から学ぶ。フィールドワーク、緑で覆われた村々、中央には広場、有機的な曲線をもつ城(グスク)、形はときを待つ。

数十年後、形は地に馴染み、子どもたちは自由に走り回る。恋人たちは夕日の中、希望、高野は諦めない。高野はロマンティックな前衛だ。

都市は感覚を剥ぎとる。狭い家、満員の通勤電車、机とパソコンが整然と並ぶオフィス、外を感じるヒマもない。効率がすべてに優先される、日常が狂いだす。

五感を取り戻す。本来、公園は自然との営みを学び、感じる場所だ。多様なコラボレーションを公園づくりに取り入れる。不完全のまま、あいまいに変化し続ける形、驚き、不思議、感覚の覚醒。

網、沖縄、堀内紀子、自らの手で一人で編みあげる。鮮やかな色とりどりの巨大な網、山あり、谷あり、所々、ガジュマルの気根のように、空中から地にのびてゆく。網による新たな地形。子どもはよじ登り、這いつくばる。水平線からやってくる夕陽が子どもを突き刺す。網が炎となって燃え上がる。戦争の記憶。

野焼き、越後、藤田昭子、現場に粘土を積み上げてゆく。いきもののような不思議な物体。乾燥させた後、わら、木を山のように積む。夜、巨大な炎が、

天高く舞い上がり、踊る。ちぎれて飛び散る、物をつくる過程の美しさ。

霧、立川、中谷芙二子。沢山のノズルを使って人工の霧を自在にあやつる。刻々と変わる風景、大きくくぼ地に充満する霧、子どもたちは浮遊し見えがくれする。一瞬の恐怖、私はどこにいるのか、この疑問こそすべての出発点だ。

1990年、象設計集団と共に事務所を東京から北海道に移転。河東(カトウ)郡、音更(オトフケ)町、字万年(マンネン(旧))鎮鎌(チンネル)小学校。木造平屋、2つの教室が事務所。体育館、音楽室、給食室、芝のサッカーグラウンド。廊下には歴代の校長の写真、鎮鎌の年寄りは全員この小学校の出身だ。

高野は古い農家を求め、最も十勝らしい暮らしを選ぶ。広々とした敷地、木造の母屋、マンサード小屋を改築しゲストハウスに、農機具小屋を馬房にして、馬場をつくり2頭の馬を飼い、生活。1995年、福島国体障害馬術で最年長で入賞する。

十勝平野のど真ん中、北に大雪山系、西に日高山脈、中央に十勝川、南に太平洋、大きな空、細胞がさわく。身体の中の自然、「私は地球である」、熱帯雨林の伐採、海洋汚染、ゴミだらけの地球、地球の痛みを体が感じる。

日本の地形は、複雑で細やかだ。場所、季節によってそれぞれ独自の美しいランドスケープにあふれている。初源にもどって自然に学ぶ。

高野は森へ向かう。森の美しさ、営みを表現したい。川を中心に、山、森、里山、平野、海、空と連続する自然の循環、生活圏。日本列島に共通するテーマだ。森の恵みで生き、森を育む。

コロナウイルスが人間を襲う。これは警告だ。変わるべきは人社会、人間個人だ。

都市の文化から森の文化へ、日本列島大公園計画。十勝千年の森は実験だ。まだ道なかば、やっと入り口までたどり着いた。観光では生きていけない。ここからは森の人が必要だ。

銀河の爆発、星がぶつかる。素粒子が宇宙を飛び回る。渦、ラセン運動。身体に刻まれた深い記憶、生命のいとなみ、46億年。高野がつくり続ける渦、ラセン。

1998年、パリ、アルペール・カーン日本庭園。ボンジュール マダム、エドモアゼル、サバツ。はじける笑顔、上下真白なスーツ、両手に花束を抱え、ムッシュタカノ到着。女性たちに1束づつ花束が渡る。石工の職人にも奥様にもどうぞ。高野は早々に現場に向かう。でも円錐形の窪地、外側からでこぼこの石、色とりどり金銀のタイルを一つづつ埋め込んでゆく。今日それぞれが一つの生命、渦との対話に集中する高野。自分勝手であと先を考えない個がそこにある。個なくして集団の自由はあり得ない。大いなる制約のもと、大いなる自由に入る。

みちのく杜の湖畔公園、高野は渦の中心に佇む。逆流する渦は大小の渦を巻き込み昔へ昔へと進む。縄文、恐竜、アロマロカリス、アンモナイト、生命の始まり、地球誕生。私はここで生まれた。

2022年、十勝、高野さんがたずねてくる。馬手にテキーラ、弓手に塩、一杯やりながら、森の話でもしませんか？

2022年 夏